

時雨

貴高真白

第四章 「堕ちることの意味」

「動き出しましたね」

翳夜は襖越しに聞こえる其々の動向に耳を傾けながら呟いた。

「—こんなにも早く？」

核政院の地下には裏を生きる道を選択した者、背負わされた者にしか逢う事が出来ない人物がいる。其の人物は、鉄格子の不気味な札で外界に認識される事を禁じられていた。

「仕方ありません、我々も立ち上がらなければ」

翳夜はゆっくりと立ち上がり、出口に向かった。

「翳夜殿」

「—」

「—あの」

「どうか耐え忍び下さい」

過去が現在に漏れ出して

「—」

痛みが快楽と交わって

「貴方は始まりも終わりも—全て知っているだからこそ」

祈りが叫びに間違われて

「—申し訳ございません」

何故が確信に王手を掛けてしまつて

「いえ—早く、貴方に死が訪れる事を願うばかりです」

翳夜は覚悟を決めた様に呟くと部屋を出て行った。

其の人物が軟禁されている部屋から表舞台に戻ると、待っていたかの様に学生服を着

込んだ少女が姿勢正しく立って待っていた。

「時間なのですね」

灯の副隊長を務める、柳 ナミヤ（リュウ ナミヤ）、は寂しげな表情で言った。

「ええ—召集は？」

「完了しています」

「—自護総領は未だ執務室にいらっしゃいますか？」

「ええ、もう会議は終わっている筈です」

「直ぐに面会を、一刻も争います」

ナミヤは頷くと鞆から内線専用携帯を取り出し、喋りながら歩き始めた。翳夜は後を

追いつながらも赤絨毯を見つめたまま、其の者との出逢いを回顧していた。

「初めまして、」

あの微笑が全ての元凶？

「負けたのです、我々は、」

そうやって、跪いて全てを投げ捨てて請うたのか？

「痛みは何にも代価が効きます、ですが心だけは其れを許さない、」

あの真意は何処へ隠されてしまったの？

「翳夜殿？」

連絡を終えたのか、ナミヤが振り返り心配そうに翳夜を見つめていた。

「いえー大丈夫です」

「ナミヤ！ 翳夜様！」

二人が立ち止まっている所に愛らしい叫び声が聴覚に飛び込んだ。

「お葉都、場を弁えろ」

「だってー久しぶりだったんだもん」

灯の一人・お葉都（オハツ）は寂しげな表情で二人を見上げた。

「ナミヤ、二年ぶりに召集したので今日は大目に見てあげましょう」

「翳夜殿は優しいですね」

「皆に伝令を送ったから直ぐに来るよ」

「ありがとう、お葉都」

「へへ、お葉都は皆の為なら頑張る」

「お葉都、塑依にも伝令を送ったのか？」

「ううん、一年前に連絡が着てもう知っているから伝令はいいって」

「ー何時もの単独行動か、危ういな」

「塑依はきっと大丈夫でしょう」

「ーそうだといいのですが」

「行きましょう」

何でもいい、真意が意味が全てが掴み取れるなら何も要らないと駄々を捏ねたのはこんな風が吹いていた？

「さてー全員集結したようだな」

第二陸下軍特別会議室に第一連隊から第十連隊までの全員が揃っていた。

「其々、好きな行動を取らせていたが今回は全員協力し合って成果を出して欲しい」

「其れはかまへんけど、何を？」

逝は上司である来宮に対して敬語も何も使わずに質疑した。

「核政院の転覆、其れと灯という反活動組織の壊滅」

「大掛かりな仕事ですね」

一が医学書に目を落としたまま呟いた。

「…仕方ない」

「ですが、灯という秘密組織は簡単に潰せますが核政院転覆はそう容易くは—」

「大丈夫、核政院は金銭問題で軍事所じゃないから」

「遠、政府は金にしか目が入っていないが実際はそうは行かないのだよ」

「瀧さん—」

「遠殿、瀧殿を其の様な呼び方で呼ぶな」

「第二蓮総副士長 崎目 論(サキメ ロン)」が叱咤した。

「論、良いのだ」

「なあ—話ずれていない？」

月日が美少女フィギアを弄りながら話を元に戻そうとした。

「気持ち悪いから弄るなよ、其れ」

杏が煙草を咥えたまま言った。

「Sのお前には言われたくない」

緑途は机を指先で叩きながら言った。

「完璧にずれているね」

新しい飴玉の袋を開けながら史伊歩は隣で眼鏡の掃除をしている鋼衛門に耳打ちした。

「そろそろ—止めた方がいいかな？」

「止めとけ、あんたが切れると最悪だから」

「分かった—立志殿、止めてくれませんか？」

鋼衛門は眼前に座っていた立志に助け舟を求めた。

「—分かった、おい！！世間話は後にしとけ！！」

珍しく叫んだ立志に一同の会話は一瞬にして止まり静まり返った。

「之でいいか？」

「ありがとう、立志殿」

立志は少し微笑を零すと瞼を閉じて、神社の肩を枕代わりに居眠りを始めた。

「いいのか寝て？」

史伊歩は呆れ顔で神社に尋ねた。

「古書探して疲れたのです、私が話を聞いておくので大丈夫です」

「立派な仲間愛ですね」

鋼衛門は満面の笑みで史伊歩に耳打ちした。

「俺は背筋が凍るよ」

「では、落ち着いた所で話を元に戻す」

周りが落ち着いたのを感じ取ると、来宮が何時もの口調で本題に入った。

「核政院の転覆は力よりも頭脳が要求される、灯の壊滅は頭脳よりも力が要求される、其処で――一・四・六・八・十は灯壊滅を二・三・五・七・九は核政院転覆を頼む」

来宮の発表によって一同は、つい先刻の楽しげな会話から一変して異様な獣の様な眼差しになった。

此の現実が夢で、あの現実は空想で、あつちの現実の本物だと品定めをしては彼女は雨を見上げていました

「総領、此の度は非常事態となっています」

核政院の軍事採択権を一手に収める、自護総領（ジゴソウリョウ）の執務室に入り、翳夜は究極的な言葉を投げ掛けた。

「……さて、如何でしょうか」

総領は額の汗を拭いながら呟いた。

「私としては、先ず同和協議会との協定見直しを優先した方が宜しいかと思いますが」

「……しかし、あれは統領がいなければ」

「左様ですか―」

「自護総領」

壁に凭れていたナミヤが痺れを切らし、翳夜と自護総領の間に割って入った。

「…はい」

「初めに大口を叩く事を謝罪します、非常事態という状況が分かってないのですか？」

「…いや、其れは―」

「何時、国内紛争に他国戦争と段階を踏んでもおかしくないという事です」

「…そうですね―緊急の会議でも開きましょう」

「あれは一体どうなっているのだ！」

ナミヤは怒りを抑えきれずに荒々しい声音で話しながら廊下を歩いてた。

「仕方ないよ、前の自護総領は暗殺未遂にあつて精神的に参っちゃったんだから―あのイスに座る勇氣だけでも、敬意を表さなきゃ」

「そうですね、ナミヤも少し我慢して下さい―我々だけでも何とか」

「…はい」

「ねね、今日は翳夜様のお家に泊まっていいいの？」

「ええ、お葉都は郷里に帰らなくてもいいように御爺様に連絡しましたよ」

「ありがとう！」

其の時、前からスーツを着込んだ女性が三人に歩み寄って来た。

「…百羽（モモワ）」

「御久しぶりです、ナミヤにお葉都―其れと翳夜」

「久しぶり、百姉ちゃん」

お葉都は満面の笑みを浮かべると百羽に抱きついた。

「百羽、御仕事は終わりましたか？」

「はい、一通り」

「そうですか、此処では何ですから私の家で夕食がてら今後について」

「わーい！！早く行こう！！」

お葉都は満面の笑顔になると外に向かって飛び出した。

「さて—どうしようか」

灯の壊滅を担当し、全権を指揮することになった瀧は呟いた。

「分担をした方がいいのではないか？」

空巳がペットボトルの蓋を開けながら呟いた。

「せやな—俺は吾子ちゃんと一緒がええ」

逝が吾子の肩に手を回しながら言った。

「私はお断りです」

ぴしゃっ、と吾子は遠慮なしに逝の手を払いのけた。

「おい、馬鹿なことやってないで単に殺せばいいじゃないか？」

「杏の言う通りだ、手っ取り早く殺るには其れが一番だ」

「…血に飢えた狼だな」

上則が小さな声でしかし確実に相手に聞こえる様に呟いた。

「んだと!？」

羅央が其れを聞き逃す訳もなく自分が座っていたイスを倒れさせながら叫んだ。

「ちょ! 則ちゃん、謝って! ごめんね、悪気はないの」

「け! だからそうやって何時までも幼馴染に護ってもらうしかお前は能がないんだな」

其の言葉を上則が聞いた瞬間、場の空気が凍りついた。羅央が其の感覚を察知し上則を見下ろすと上則は瞳の色を紅色に変色させ羅央を睨みつけていた。

「やだ! 則ちゃん、恐い!」

場の空気に耐え切れなくなった羅央が近くに座っていた吾子にしがみ付いた。

「しょうがねえな」

杏はゆっくりと立ち上がると上則の後頭部を平手で殴った。

「おい! お前が意識ぶっ飛ばすと鋼衛門の次に手が付けられないんだからな!」

「…あ—ごめん」

「ったく、瀧、話を続ける」

「則ちゃん、もうしちや駄目だよ」

「――」

「上則の能力？」

作戦会議を終えた瀧と論が自宅に向かう為、専用車に向かっていた時珍しく羅央が二人を呼び止めた。

「あいつは普段、感情を表に出さないから今日まで気づかなかったがあれは一步間違えたら化け物だぜ」

「羅央」

「あ？ 何だ？」

「彼の前で其れは絶対に禁句だ」

「禁句になる程、秘密なの？」

羅央の後で隠れていた羅柚が顔を少し出しながら尋ねた。

「そうだ」

「禁句ってどういう事だ？」

「彼の素性について詳しい事は未だ分かっていないが、幼馴染の遠を護る為に仕方なく力を持ったらしい」

「遠がそう言ったのか？」

「ああ、其れ以外は未だ言えないそうだ」

「見たのか？」

「隙間から」

「――そうか」

何を護ると叫んで、子供は泣く？ 何を引き換えにと叫んで、大人は微笑む？ では

――君は何と？

「綺麗な満月だな」

櫻は、部屋の窓から見える満月を見上げながら呟いた。

「陸軍独立派と灯―もし、双方に俺達が入ったら敵対する事になるんだな」

創治は今のところ何も知らない、だからこそ危険だ。独立派陸軍の組織図を見なかった事を櫻は少し後悔した。其の時、リビングの食器棚が勢い良く倒れる音が聞こえた。

「父―さん？」

あの食器棚は自分の出産祝いにと母方の祖父から頂戴した棚。兎に角、重いのが特徴で憲一郎一人で動かすのは絶対に不可能の筈。

「父さん！ どうしたんだ！？」

櫻は階段を降りながら憲一郎を呼んだ。そして、リビングの扉を開いたと同時に悲惨な光景が眼に飛び込んだ。自分と同年代の青年と少女が憲一郎を囲んで―憲一郎の体から得体の知れない切り傷によって鮮血が―捻り過ぎて溢れ出した水道水のように止め処なく、ごめんなさいと言っている様に。

「父さん―」

「あ？ あんた、等士櫻か？」

「―そうだ」

同年代の筈なのに異様な圧迫感を自分に差し向ける青年に櫻は頷く事しか出来なかった。

「俺、あんたに恨みはないんだけど殺さなきゃいけないくてさ」

「！？」

「仕方ないだろ、どんな形であれ未来に必要な人間は零れ落ちて土に還るのが本質だろ？」

杏はゆっくりと煙草を口から離し、綺麗に清掃されたフローリングに捨てて靴底で踏み潰した。

「止めろ！ 何―を―」

櫻は杏に向かって叫んだ筈だったが、杏は其処には居なかった。

「嘘だろ―」

「何処——見ているんだ？」

「！！」

後ろを振り返ろうと体を動かしたが、杏は素早く櫻の髪を掴んでくると反転させると壁に思いつき顔面を叩きつけた。

「ぐっぐ」

櫻は叩き付けられたショックで右側の真ん中の歯が三本抜けた事を何となく感じた。

「弱いな——平和漬けの日々だったからか？」

杏が髪を離すと櫻は其の場にずると倒れて口から鮮血を溢れ出させながら、彼を見上げた。杏はソファの背に凭れ掛かり懷から紙を取り出して読み上げた。

「何々——等士櫻——十六歳——九歳の時に性同一性障害と診断とされる——へえ」

最後の言葉を言った瞬間、杏は単なる笑みとは言えない何か企んでいる笑みに変わった。

「薔、今すぐ瑛未創治を此処に呼べ」

「——ええ」

「何——を？」

「お前さ、男なんだろ？」

「——？」

「でも、体は女」

ゆっくりゆっくりと新しい煙草に火を付けながら杏が近寄る。

「そういう奴ってさ、何を一番望まない？」

「——女として——扱われる事」

性が存在しなければ、闘いなんて

「だったら分かるよな、俺が今からやろうとしている事」

二極化が、結局は愛おしい存在なんて